

10月の最高気温との差、すでにマイナス10℃以上！ ヒートショックに気を付けたい季節到来

入浴中の事故死件数の認知度はわずか4.2%

60代以上の5人に1人は冬場、どこも暖めずに入浴していると判明！

子世代の7割「ヒートショック説明できる」、しかし2人に1人が親への対策できず

～「おふろ白書2018」ヒートショックに関する当事者世代・その子世代の意識と実態～

湯まわり設備メーカーの(株)ノーリツ(本社:神戸市、代表取締役社長:國井総一郎、資本金201億円、東証一部上場)は、現代人とおふろの関係に迫るための意識調査を実施し、11月26日の「いい風呂の日」に先がけて、「おふろ白書」として発表しています。第15回となる今年は、超高齢社会において、社会問題化している「ヒートショック」に焦点を当て、全国の高齢者である60代以上と、その子世代の40～50代、合計2,452人を対象に調査しました。

本年11月度の気象庁発表の最高気温は11月5日の21.9℃で、10月度最高気温を記録した10月7日の32.3℃に対し、マイナス10.4℃となりました。今後気温降下がさらに本格化することを受け、おふろ白書から抜粋した本リリースを発表します(調査概要は末尾に記載)。調査結果の詳細は以下URLからご覧ください。

http://www.noritz.co.jp/library/csr/social/yoku_shokuiku/hakusho/ofuro_hakusyo2018.pdf

■ ヒートショックを含む入浴中の事故死の年間件数の認識、なんと正解率は4.2%。

国連の世界保健機関(WHO)は65歳以上の人のことを高齢者と定義していますが、この層の日本の総人口に占める割合(高齢化率)は、内閣府発表によると平成29(2017)年10月1日現在、27.7%と2015年に比べると1.7ポイントアップ、確実に上昇しています。

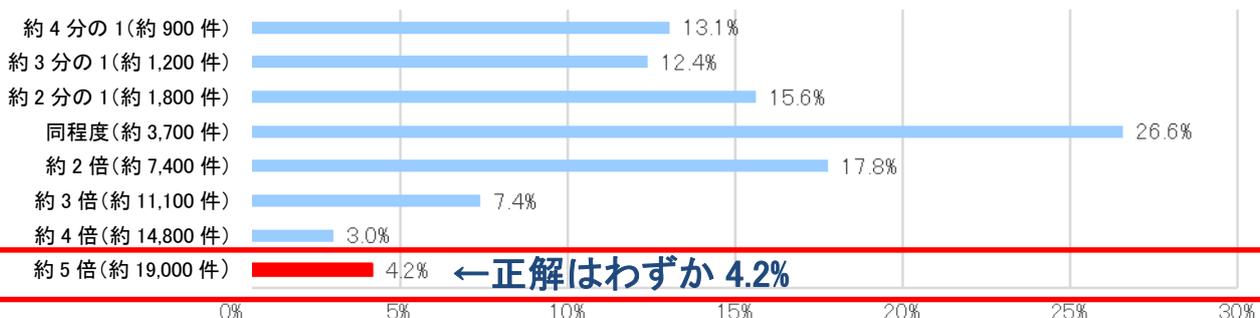
「厚生労働科学研究費補助金 入浴関連事故の実態把握及び予防対策に関する研究 平成25年度 総括・分担研究報告書 研究」によると、日本国内での入浴中の死亡事故者は年間約19,000人(救急車で運ばれた患者数からの推計)、なかでも家庭の浴槽内での溺死者数はこの10年で約7割増加し、その9割が上述の65歳以上の高齢者です。そして、こうした入浴事故の原因の一つが、身体が温度変化を感じ急激に血圧が上下することで心臓や脳の血管にダメージを与え、意識を失う、脳梗塞、心筋梗塞を発症するなどの「ヒートショック」です。

本調査では、ヒートショックを含む入浴中の死亡事故がどれほど理解されているのかという実態から調べました。

「入浴中の事故死の年間件数は、交通事故死と比較してどの程度だと思いますか?」と尋ねたところ、正解(約5倍の約19,000件)したのは今回の調査対象の高齢者・その子世代全体で4.2%でした。1番多い回答は「交通事故と同程度」で26.6%と、入浴中の事故死数の多さに対する認識は低いことがわかりました

Q.入浴中の事故死の年間件数は、交通事故死と比較して、どの程度だと思いますか?(40代以上、n=2452、単数回答)

※交通事故死は年間約3,700件(警察庁交通局 交通事故死者数の推移(昭和23～平成29年))より。



■高齢者の冬場の入浴時対策、「浴室・脱衣室・リビングなどすべて暖める」がトップ。

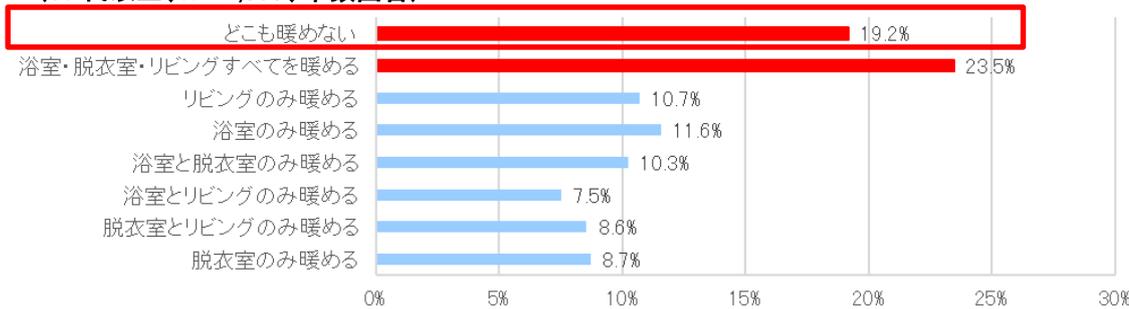
いっぽう、およそ5人に1人は「どこも暖めない」

実際の高齢者の状況の確認として、「冬場、入浴前後で寒さを感じないよう、浴室・脱衣室・リビングなどを暖めていますか?」と尋ねたところ、60代以上は「すべて暖める」という回答がトップで、親世代は自衛をしている姿が浮かび上がりました。いっぽうで、2位は「どこも暖めない」で19.2%。高齢者のおよそ5

人に1人は十分な対策を行っていないことも明らかになりました。

Q.冬場、あなたは入浴前後で寒さを感じないよう、浴室・脱衣室・リビングを暖めていますか？

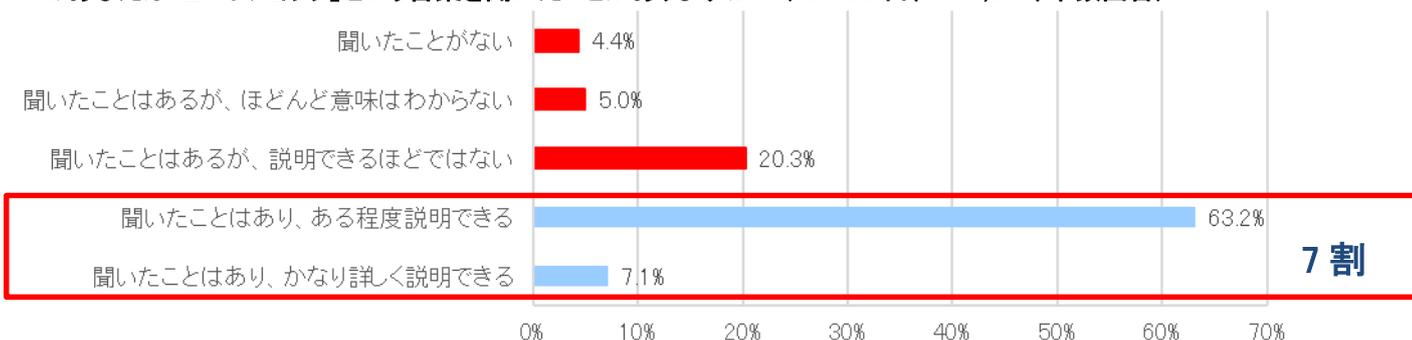
(60代以上、n=1,355、単数回答)



■ヒートショックに関して「説明できる」子世代約7割。しかし2人に1人は、「自分の親には対策なし」が現実

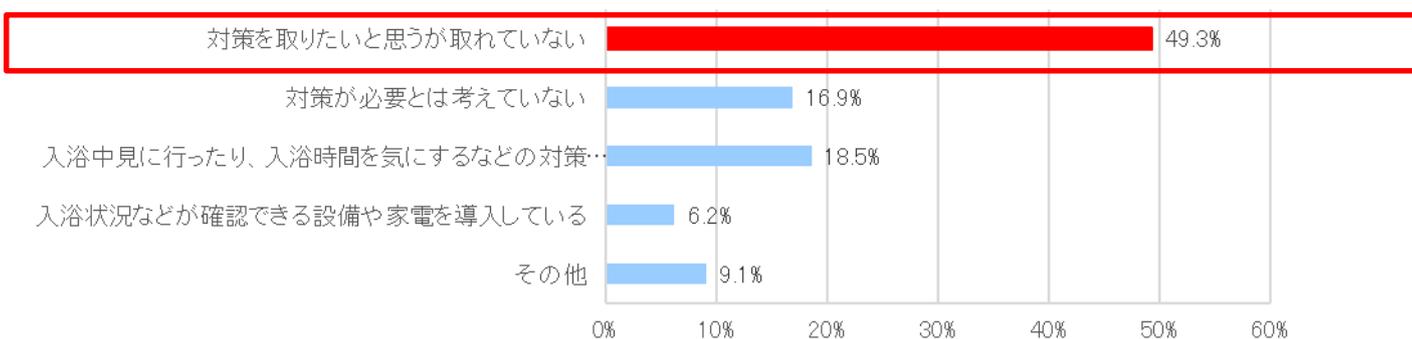
さらに、『ヒートショック』という言葉を知ったことがあるか・説明できるかという問いに対しては、親の見まもりが必要となってくる40～50代をみると、70.3%が「説明できる」と回答しました。いっぽうで、説明できると回答した子世代に、「入浴時に親御さんが何かあった時のための対策を取っていますか？」と尋ねたところ、「ヒートショックについて説明できる」と回答したうち49.3%は「対策を取りたいと思うが取れていない」と回答。子世代の知識と親に対する実践が結びついていない状況が明らかになりました。

Q.あなたは「ヒートショック」という言葉を知っていますか？(40～50代、n=1,097、単数回答)



Q.入浴時に親御さんが何かあった時のための対策を取っていますか？(40～50代、n=771、単数回答)

ヒートショックについて説明できると答えたグループ

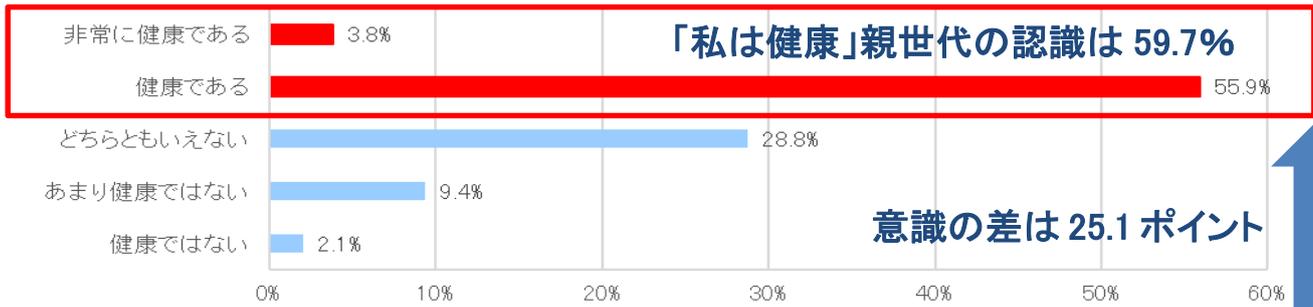


■「親が健康だ」と思う子世代は約34.6%に対し、親世代は59.7%が「自分は健康」と回答

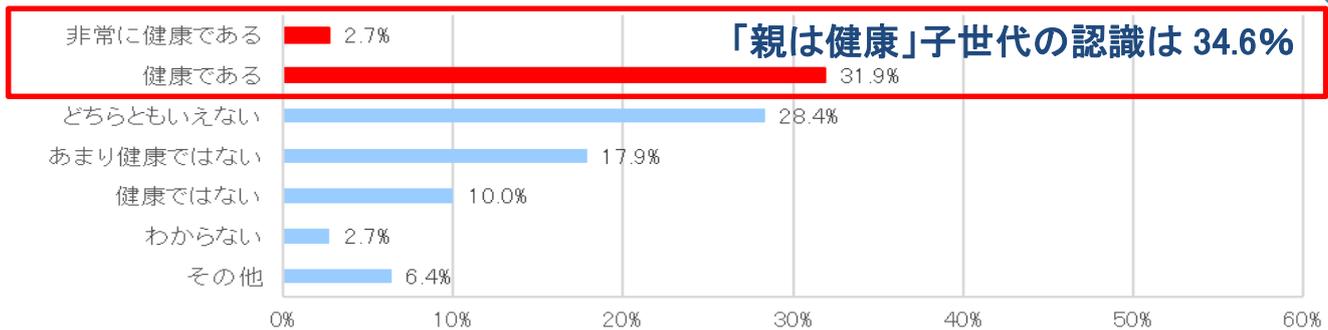
40～50代(子世代)に、「あなたは、ご自身の親御さんが健康だと思いますか？」と聞いたところ、自分の親は非常に健康+健康だと思っているという回答が34.6%でした。これに対し、見まもりが必要になってくる60代以上では、自分自身を健康だと思っているという回答が59.7%で、その差は実に25.1ポイント。世代間において健康に関して大きな意識の差があることが判明しました。

前述の結果と総合すると、子世代はヒートショックに対し知識もあり、親の健康にシビアな感触も持っていますが、半数以上は対策が取れていないことが浮かび上がります。

Q.あなたは自分を健康だと思えますか？(60代以上、n=1,355、単数回答)



Q.あなたは、ご自身の親御さんが健康だと思えますか？(40~50代、n=1,097、単数回答)



今回の調査を受けて、60代以上の世代は、一定のヒートショックへの認識があり対策も取っていることがわかりましたが、いっぽうで冬場でもどこも暖めないなど、対策が取れていない人もまだまだ多く存在することがわかりました。また、その子世代はヒートショックに対し知識もあり親の健康にシビアな感触も持っていますが、49.3%は親への対策が取れていないことも判明しました。このギャップは、当社としては埋めていくべきものと考えております。

まずは、親子間で声を掛け合い、見まもる意識を高めていただくことが、今後さらに増加する可能性がある高齢者のヒートショックを防ぐ第一歩です。そのために、下記のような対策を取っていただくことができます。

<誰でも簡単にできるヒートショック、のぼせ対策方法>	
① 室内、脱衣室、浴室との温度差をなくす	脱衣室では、セラミックヒーターなどの簡易ヒーターを利用しましょう。浴室内はヒーターの利用が危険なため、事前に温める工夫としてシャワーによる浴槽へのお湯はりがお勧め。蒸気が部屋に熱を効率的に拡散させます。また、浴室マットなどで、冷えた浴室の床部分が直接体に触れない工夫も効果的です。
② 身体への負担を軽減する	肩からのかけ湯や全身浴は心臓など身体への負担になりやすいですが、かけ湯で肩を濡らして半身浴をすると、その部分が冷えて肩まで湯船に浸かろうとしてしまいます。かけ湯の際、湯船への入浴時も「おへそから下」を心掛け、上半身が冷えてくる場合は、乾いたタオルを肩にかけましょう。
③ のぼせ防止	入浴する際の温度は41℃以下で、10分間以内を心掛けましょう。
④ 家族で見守る	入浴する際は、家族に声をかけて入浴しましょう。

【調査概要】

調査対象	ノーリツ製品所有者専用サイト「CLUB NORITZ」(クラブノーリツ) 会員		
調査方法	インターネット調査	回答数	2,452人
内訳	<性別別> 男性：1,881名、女性：571名 <年代別> 40代：373名、50代：724名、60代：826名、70代：443名、80代以上：86名 ※「おふろ白書2018」全文は当社ホームページからご確認ください。 http://www.noritz.co.jp/library/csr/social/yoku_shokuiku/hakusho/ofuro_hakusyo2018.pdf		

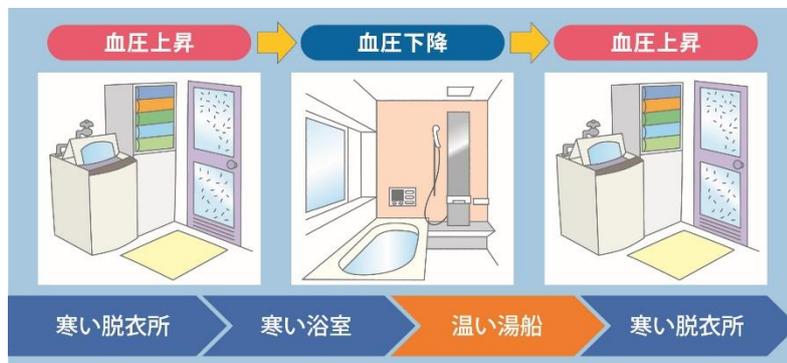
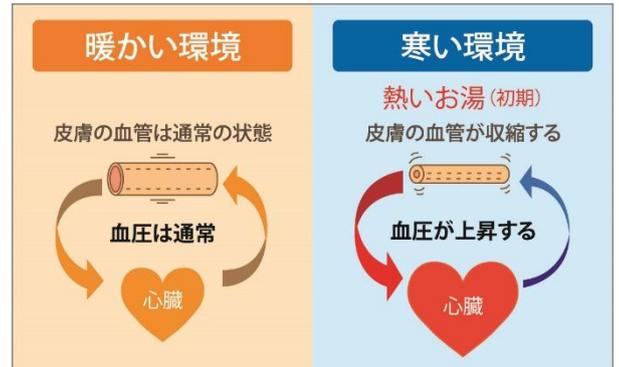
【ご参考:ヒートショックとは】

年々増加する「入浴事故」

日本国内での入浴中の死亡事故は年間約 19,000 人と推定されています。中でも家庭での浴槽内での溺死者数はこの 10 年間で約 7 割増加し、その 9 割が 65 歳以上の高齢者*です。

入浴事故の原因として代表的なものに、身体が温度変化を感じ、急激に血圧が上下することで心臓や脳の血管にダメージを与える「ヒートショック」があります。人間の体は急に寒さを感じた時、熱を奪われないように体の表面の血管を収縮させますが、この際、血管抵抗が増して血圧が上昇します。逆に暖かい場所に行くと血管は開き血圧は低下します。このような血圧の急上昇、急降下により、発生する現象がヒートショックです。

一般的な入浴パターンにおいても、ヒートショックが起きるメカニズムとして以下のような血圧の急激な変化ポイントがあることがわかります。



- ① 暖房の効いている部屋から寒い脱衣所に移動して衣服を脱ぎ、寒い浴室に入ると、血圧が急激に上昇します。
- ② 温かい湯船に入り、身体が温まると血管が拡張して、血圧が下がります。
- ③ 浴室を出て寒い脱衣室に移動すると血圧が上昇します。

*厚生労働省調べ

【ご参考:複数企業の共同の取り組み「STOP!ヒートショック」】



STOP!ヒートショック™

ノースは、近年、社会問題のひとつとして注目されている「ヒートショック」に関する正しい理解の浸透と対策を促進するため、理念をともにする複数企業の共同での取り組みとなる「STOP!ヒートショック」プロジェクトに賛同し、啓発活動に参画しています。

「STOP!ヒートショック(TM)」プロジェクトは、ヒートショックや住まいの寒さなどに関する理解と対策方法を社会に広め、一人でも多くの方にリスクを回避していただけるよう、対策の啓発を目的とした企業協働の活動を開始しています。

本プロジェクトは、企業が協働で行う社会貢献型啓発プロジェクトで、まだ認知の低いヒートショックのリスクと対策を呼びかけるべく、様々な啓発活動を進めます。

※2017年12月1日～2018年2月28日で単発キャンペーンを実施。本年度より正式にプロジェクト化。